



ほり スクールソーシャルワーカーだより

こと ほりかわしげとし

41

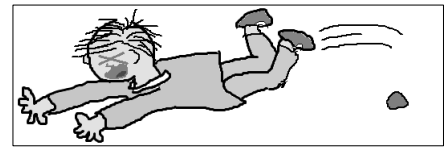
☆ 恥の文化 の巻 ☆

幼子^{おさなご}が目の前で石につまづいて転んで泣いています。あなたは「痛かったおエ。よし、よし」と共感しますか？「ほーら、だから言ったでしょ。馬鹿お」と叱りますか？それとも、「転ばせたこの石が悪い！」と石ころをとがめるでしょうか。

☆

私たちは日頃から“本音と建マ前”、“公^{おおやけ}と私^{わたくし}”を知らぬ間に区別しています。公の場所ではみんなが同じように過ごし、トラブルが無いようにします。本音を出して良いのは、親しい人の前でだけです。皆と違うことをすると、みんなから笑われ、恥ずかしい思いをする、それを知っているから周りの様子を見て行動するのです。

『世間様』という言葉が聞かなくなりましたがそれは、「建マ前」と「他人の目」の事。今の世の中はわれが、わたしが、の主張がまかり通るようです。それでもこころのどこかで、『世間様』を感じ、他人に笑われることに敏感なのです。その結果が、他人の目、評価を気にして生活することなのでしょう。



幼子は、自分の気持ちにしたがって生きています。だから痛かったら泣きます。でもおとなは世間の目を気にしてつい転んだ子を「バカお」と叱り、何かを悪者にしてみても自分も笑われないようにする。どちらの言葉かけも、公の場で泣く子と自分を正当化する社会的な行為なのです。

子どもの痛みへの声かけに、社会と自分とを意識した行動(建マ前)、あるいは子どもと自分の関係を意識した共感・受容する行動(本音)、どちらを見せるのが良いのでしょうか。

☆ ★

泣いている子に必要なのはなぐさめです。その慰めが子どもに、支えまくれるおとなを確認させます。確認した子は安心して暮らし、その安心をベースにして「自分らしさ」を作っていくのです。泣く子に指導や、責任転嫁のことばかりを繰り返すと、「自分はダメな子なのだ」と思い込ませるかもしれません。将来、いやな事があったとき、すべまを人のせいにして、八つ当たりする相手を見つける子に育つかもれません。そちらの方が『世間様』に顔向けできない事になりそうです。

☆ ★ ☆

あなたは不登校を、いけない事のように感じていませんか？「不登校は、こころの風邪ひき」です。根性では乗り越えられません。不登校は、子どもが転んだのと同じ状態なのです。どうか、手を差し伸べま、立ち上がるのを待ってあげて下さい。一緒に、こころの痛みを感じてあげて下さい。

日々の積み重ねが、人生をつくる